

追悼の辞

2016年10月20日、専修大学文学部哲学科の神崎繁教授が逝去されました。享年63歳でした。これまでご病気の治療を続けながらも、決してつらそうな様子を見せず、8月のオープンキャンパスでは哲学科の個別相談を担当されていました。たまたま通りがかって声をおかけすると、いつものにこやかな表情で応じてくださり、それからまもなく永遠のお別れをすることになろうとは思いませんでした。

神崎繁先生は、兵庫県立姫路西高等学校、東北大学文学部をご卒業になり、東京大学大学院人文科学研究科に進んで修士課程・博士課程で哲学の研究を深められました。その後、茨城大学人文学部、東北大学教育学部にお勤めになり、1987年に東京都立大学人文学部に移られました。東京都立大学は2005年から首都大学東京に名称変更され、学部名も都市教養学部となり、その人文社会系長と大学院人文科学研究科長を務められたのち、2007年に専修大学文学部に着任されました。

神崎先生のご専門は古代ギリシャ哲学で、現在岩波書店から刊行中の新版『アリストテレス全集』（全20巻・別巻1）の編集委員を務めておられました。この全集は、岩波書店創業100年の記念事業でもあり、約半世紀ぶりの完全新訳です。最新の研究成果をふまえ、これまでの訳語を見直し、アリストテレスを現代にいきいきと蘇らせる——その編集の指揮を執られ、ご自身も清新な翻訳を著された先生は、ま

さにこの分野を代表する研究者として活躍しておられました。

先生は専門的な学術論文や著書のほか、一般読者に向けたNHK出版「シリーズ・哲学のエッセンス」の『ニーチェ—どうして同情してはいけないのか』（2002年）、『フーコー—他のように考え、そして生きるために』（2006年）や、岩波書店「双書・哲学塾」の『魂（アニマ）への態度—古代から現代まで』（2008年）なども著されました。こうした書物では、哲学テキストをめぐる先生自身の深い思索の跡が、精緻でありながらもやわらかく語られています。特に「魂（アニマ）」についてのご著書は7日間の集中講義という形式をとっているため、先生の講義を聴いているかのように読み進めることができます。中国の文学・思想を研究しているわたくしにとっては、イエズス会の宣教師によってキリスト教だけでなくアリストテレス哲学もまた日本および中国に導入されたことや、そこに介在する翻訳の役割について、多くを学んだ本でした。

翻訳といえば、文学部創立50周年記念企画の一つであった10月1日の講演会「翻訳がつくる未来」の企画にもいち早く賛同していただき、講師のお一人として「翻訳語としての〈幸福〉」をテーマに講演してくださる予定でした。その数日前、体調が思わしくないという連絡を受けたわたくしに代読の役割を委ねていただき、メールでやりとりをしたのが、悲しいことに先生との最後の対話となってしまいました。予定されていた講演は、アリストテレス『ニコマコス倫理学』翻訳の経験に基づいて、ギリシャにおける幸福観がヘレニズム期に、活動としての「幸福」から、心の状態としての「幸福」へ大きく変貌を遂げたこと、翻訳は言葉を置き換えただけで完了するものではなく、時代ごとに異なる語義の地層を丁寧にはがしていくような考古学的な作業

が求められることを解き明かされるものでした。代読の準備のために先生のテキストを読みながら、「心の平安」(アタラクシア)こそが幸福であるというエピクロス派の考え方に深く共感したことが思い出されます。

このようにふりかえると、先生にもっといろいろと教えを受けたかったという思いがあふれてきます。洋の東西を問わず、また哲学の分野に限らず、該博な知識をお持ちであり、つねにおだやかで気品にみちていた先生が、今もどこか遠いところで、あの少年のようなきらきらした目を輝かせて、静かに本を読んでおられるような気がしてなりません。

謹んでご冥福をお祈りいたします。

2017年3月

専修大学文学部長 廣 瀬 玲 子